

これはわが体なり

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-19 キーワード (Ja): キーワード (En): Tohoku Gakuin University 作成者: 北, 博 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24772

これはわが体なり

大学宗教授主任 北

博

出エジプト記、第二四章九〜一一節

9 モーセはアロン、ナダブ、アビフおよびイスラエルの七十人の長老と一緒に登って行った。10 彼らがイスラエルの神を見ると、その御足の下にはサファイアの敷石のような物があり、それはまさに大空のように澄んでいた。11 神はイスラエルの民の代表者たちに向かって手を伸ばされなかったので、彼らは神を見て、食べ、また飲んだ。

マタイによる福音書、第二六章二六節

26 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。「取って食べなさい。これはわたしの体である。」

旧約聖書では、時折重要な場面で食事が特別な意味をもって行なわれます。例えば創世記三一章四三―五四節では、緊張関係にあったラバンとヤコブが協定を結び、証拠となる石の傍らで共に食事をします。この場合の食事は、一つ間違えば敵どうしとして戦わなければならない相手とぎりぎ

りのところで和解した際に行なわれる共同の食事です。それ以外にも、様々な重要な意味を持った共同の食事の記事があちこちに見られますが、食べるといふ人間の最も基本的また原始的な行為と一緒に「行なう」ということには、理屈では説明しにくい大きな意味があるように思われます。

出エジプト記二四章九—一節は、イスラエルの七十人の長老（つまり民の代表者達）が神を見ながら食事をするという、実に不思議な箇所です。旧約聖書には、神を見た者は死ぬという考えがあります。それに、神と共に食事をするなどという場面は、他に例がありません。ただ、前後の文脈から言えば、神の命令でモーセに導かれてエジプトを脱出し、シナイの麓まで来た民が、神から自分の民であることを宣言され（出一九・六）、神と契約を結ぶ場面なので、それに伴う食事が行なわれることは自然なことのように思われます。

ところで、この箇所を読むと、ある出来事を思い出します。若い頃私は（その頃は東京に住んでいましたが）、山谷と呼ばれるいわゆる寄せ場に入入りしてました。寄せ場というのは多くの日雇い労働者がある日の仕事を求めて集う場所、当然のことながら仕事にあぶれた人々、働けなくなった人々が、沢山野宿生活をしています。また、そこにはカトリックや日本基督教団、福音派など、多くの様々な教会が入り乱れて活動していました。当時の私は、東北学院大学出身のある牧師が始めた食堂で、皿洗いなどを手伝ったりし、店じまい後は炊き出しと称して雑炊などを車に積んで、公園や川岸、ガード下などで野宿している方々に給食をしていました。また、この食堂には、

カトリックの修道女や修道士、司祭なども出入りしていました。

そんなある日、私はこの食堂で若い修道士と激しい議論をしてしまいました。今から考えると、彼の主張はいわゆる「解放の神学」のややラディカルなものだったと思われませんが、その頃の私からは、この若い修道士の言うことはあまりに極端で、キリスト教の範囲をまるで逸脱している、と見えたわけです。当時の私は、若さのせいもあって、議論になると全く容赦がありませんでした。彼はとうとう答えに窮してしまい、最後に苦しそうに「とにかく一度〈越冬〉を見に来てください」と言いました。

ここで〈越冬〉について、少し説明致します。年末年始はこの会社も休業しますので、工事がなくなつて、日雇い労働者達は仕事にあぶれてしまいます。更に、山谷周辺には様々な公共施設が福祉の仕事をしています。それも年末年始には全部閉じてしまいます。結局、その口暮らしをしている山谷の労働者や周辺の野宿生活者達は、寒さが一気に厳しくなる十二月末から一月上旬の厳冬期に、仕事もなく福祉からも放り出されて野宿生活を強いられることになるわけです。当然の話ですが、体力の弱った人は生命の危険が出て来ます。その危険を少しでも緩和するための自衛策として、毎年この時期になると山谷争議団が中心になって、山谷周辺の野宿生活者達をある公園に集め、焚き火をし、毛布や食事を提供する活動が行なわれるのです。当時、キリスト教関係者や医療関係者など、かなりの数の支援者達もボランティアとして活動をしていました。

私は元旦の早朝に、自転車で公園に行きました。途中、着飾った和服姿の幸せそうな家族連れが、あちらこちらで談笑しながら通りを歩いていました。公園は、機動隊によって囲まれ、封鎖されていました。公園内では、あちこちで鉄道の枕木が燃やされ、タールの臭いと煙が立ち込め、まるで戦場のようなでした。その中を、スキンヘッドで小指のない一見してヤクザと分かる一人の男が、争議団の吊るし上げを受けていました。彼は現場に労働者の数を揃えて連れて行くいわゆる手配師で、ある労働者に暴行を働いたことで糾弾されたそうです。彼は台の上に立たされ、マイクで罵られたりからかわれたり、正座させられたりしながら、結局六時間も糾弾を受け続けました。

私はと言うと、医療班に配属され、薬箱等の入ったかばんを提げて、公園とその周辺を巡回しました。医師や看護師は重症患者への対応に追われ、医療班のテントの中は結核などの患者で溢れ、頻繁に救急車がやって来ました。毎日のように患者が搬送先の病院で死んで行きました。山谷では、一冬に百人位の野宿者が亡くなるそうです。医療班は、さながら野戦病院のようでした。巡回していると、沢山の人々が体調不良を訴え、血圧を測ると実際に数値がよくありませんでした。しかし、予算不足のため、余程のことがない限り薬を使うことは許されませんでした。私は医師でも看護師でもありません。それでも私は、すがるような目をして私を「先生」と呼ぶ人々を前に、症状を聞いて診察するふりをし、薬と称して「梅生姜番茶」を飲ませました。不思議なことですが、相手の体の悪い部位に直接手で触れ、さすると、相手の気持ちいが伝わって来るのです。そうすると相手も

また、少し安心したような表情を見せました。偽医者、私はこのようにして、早朝から食事を取る暇もなく働き続け、やがて日が暮れました。私は心身ともに疲れ果てていました。

私は食事を取るよう言われ、大勢の野宿者達と共に給食の列に並びました。ところが食事を持って医療班に戻ると、立錐の余地もない有様で、座る場所はありませんでした。私は仕方なく、野宿者達に混じって公園の地面に腰を下ろしました。粗末な器は汚く、各自が食事後自分でざっと洗ったものをそのまま使っていました。それだけでも、器の中の雑炊を口に入れることには、気持ちの上でかなり抵抗がありました。暫したためらった挙句、私は意を決し、雑炊を口に入れました。調理した人には本当に申し訳ありませんが、私にはそれがとてもまずいと感じられたのです。同時に、人間は食べなければ死ぬ存在なのだとも感じました。私は雑炊を苦勞して飲み下しました。煙の煤でうす汚れたカーキ色の、黙々と食事する夥しい人の群れの中で、私も野宿者の一人としか見えなかったことでしょう。私は、この群集の中に埋没して食事していることに、不思議な安らぎを覚えました。

その時ある言葉が、ふいに腹の底から嘔吐のように湧き上がり、私の体の中を響き渡りました。私は、〈声〉を聞いたように思ったのです。「これはわが体なり」。それは、イエスが十字架にかけられる前の晩、弟子達と過越しの食事をする際に、パンを裂いて言ったとされる言葉です。

これが私のささやかな神秘体験です。私は、この奇妙な体験をどのように受け止めてよいのか、

当時はよく分かりませんでした。それでも、あまりに衝撃が強かったので、これを単なる異常な精神状態に還元する気にはなれませんでした。私は、この体験の意味を理解し、それを言葉として明確にしたいと思い、そのことが後に神学を志す一つのきっかけとなったのです。